

都道府県別賞一等

幸福論

岡山県 倉敷市立南中学校 一学年

川島 孝太

僕は今、骨折している。全力疾走の最中、段差でつまずき、ひじと指を計三カ所骨折。そのまま病院で緊急手術、入院した。僕にとって何もかも初めての経験で、それから二カ月、勉強も部活も、日常生活でさえも思うようにならず、もどかしい思いをしている。周りの人にもたくさん迷惑をかけてしまつて、少しへこんでいる。早く元のように元気になりたいと思う気持ちばかりが焦つて、少々疲れてもいる。中学生という気楽な立場の僕でさえ、こんなに追い込まれるのだから、一家を自分の収入で支えなければならぬ立場の人にとって、病気やケガは、心まで破壊しかねないと思う。

一週間に一度、病院に行ってギプスの治療とレントゲンをしてもらうが、約六千円かかっている。家計に負担をかけているだろうとこれもまた落ち込む原因だったが、母はにっこりとほほえみ、「保険をかけているから、心配ないよ。」と言った。それが僕の気持ちを軽くさせた。

僕には幸福論がある。「幸福にはお金がつきものだ」ということである。「幸福＝お金」ではないが、心身共に満たされ幸せであるためには、多少お金が必要だと思つている。たとえば、子どもにとって最も嫌なことの一つに両親のケンカがある。両親がケンカをしているのを見たことはないが、もしそんな場面を見かけたら、小心者の僕は動揺し、ゆううつになつて眠れないだろう。世の中の夫婦ケンカの理由は「お金のこと」が多いと聞いたことがあるから、やっぱり、「お金」は幸せを運んでくれると言える。お金の話をするとかかせこくて嫌なやつのようなが、真実だ。

そんな大事な「お金」が、ある日突然手元からなくなつたら……考えるだけで恐ろしい。病気やケガで働けなくなる、莫大な治療費がかかる……誰にでも起こりうる話である。自分だけでなく、周りまで不幸におとし入れることになる。

今回、生命保険のことを書くにあつて、少し調べてみた。生命保険の始まりは十七世紀のイギリス。牧師の葬儀費用の積立制度だったと言われる。一度に多額の葬儀費用は払えないから、みなで少しずつ貯めた中から払おうというものだったようだ。「人助け」から始まったと言えるかもしれない。しかしその仕組みには不公平な部分があったことから不平不満が出てきて、長く続か

## 第54回中学生作文コンクール

なかった。今回、僕は骨折の治療で、保険会社から給付金を出してもらえなかった。それまでは、たいした病気やケガもなかったから給付金をもらったことはない。月々支払っていた保険料もほとんど返ってきていない。父は「安心代。お守りのようなもの。」と言っているが、保険の仕組みを考えると、多額のお金を必要としている人の所へ、渡っていったのだろう。「人助け」と言われてもなんだか納得できないが、もしものときのことを考えて少しずつ出していたお金が、必要な人の所へ行っているのだから、すごい仕組みができていると思う。今回、僕もそのありがたみを感じた。保険がなければ、母はもとと不機嫌だっただろう。保険に感謝。というより、僕のことを考え、保険に加入してくれている両親、祖父母に感謝である。

結局、保険というのは、未来のもしもについて考えるということだ。今後、何が起ころっても、自分のもとより周りが不幸にならないように、整えておく姿勢なのだ。「幸福論（幸せにお金は欠かせない）」を唱える僕としては、自分が社会人になったら、よく考えて、保険に入ろうと思っている。ただ、保険会社や保険の種類など複雑そうなので、情報をよく見極める目が養えるかどうか、とても不安である……。